J015-P003 **時間：5 月 30 日　17:00-18:30**

熱圏準２日周期波の鉛直構造について

Vertical structure of the quasi-2-day wave in the thermosphere

山田　雄二[1]，竹田　雅彦[2]，津田　敏隆[3]，中村　卓司[3]
Yuji Yamada[1], Masahiko Takeda[2], Toshitaka Tsuda[3], Takuji Nakamura[3]

[1] 地磁気観測所，[2] 京大・理・地磁気センター，[3] 京大・宙空電波
[1] Kakioka Magnetic Observatory, [2] Data Analysis Center for Geomag.and Space Mag., Kyoto Univ., [3] RASC, Kyoto Univ.

前回までの報告で，低緯度での長期間の地磁気東西成分毎時値の時間変化には，２日周期変動がかなりの振幅を持って存在していることを示すことができた. しかもそれは西向きに伝搬する東西波数３の伝搬性の地磁気擾乱であり，１月と７月に振幅が最大となることが明らかとなった. これらの特徴は中間圏～熱圏下部における風の観測から得られた準２日周期波の空間構造とよく一致している. このことはさらに上層にも同様の構造を持つ風系が存在し，電離層ダイナモ作用によって電離層電流が生じていることを示唆している.

今回は高度９０ｋｍ付近の京都大学の流星レーダーによる風のデータから抽出した２日周期変動と上記の伝搬性地磁気変動とを統計的に比較した. これを元にダイナモ層と熱圏下部とでの２日周期波の振幅, 位相の違いの推定を試み，この波動の鉛直構造について議論する.